

光のせせらぎ

— 目次 —

すべてのものは

メタモルフオーゼ

旋律

めぐみの雨

矜持

迷い子

砂の球果

伴走者

芽ぐむまで

※

春を捧げて

あなたがあまりにも

四月の夜

星の子どもたち

泣き顔

驟雨

苦い実

※

やさしい波

やわらかな響応

声にさわる

祈るひと

若葉の声

あなたの指が

現の感触

溺れぬように

解けないパズル

※

天使がいた夜

刻印

抱擁

帰る人びと

あそぼう

いれもの

女というもの

すべてのものは

ほのぐらい森の底

ときおり射しこむ木漏れ日に葉裏は踊る。

清流は湧き出すそばから底土を鈍くきらめかせ

盛りあがりしては水鏡を崩しつづける

ゆらめく虹彩も毛髪も唇も爪も

水面に留まることはない。

分子に融合する快樂に浸りながら

わんわんと溶けてゆくのみ。

色あざやかに着飾った川が

余韻を呑みこんでは四方に拡散させている

枝にとまる鳥は知っていた。

光からもたらされる色の恵みの限りなさを。

闇が奪いそこねた色の恵みのふくらかさを。

川を泳ぐ魚は知っていた。

豊かに森を包んでいるのが

宙から降り積もる光に後押しされた

透明な反射光であるのを。

鳥がはばたき魚鱗の輝くを見るたび

わたしたちは思い起こせるだろう。

赦されて在るすべてのものは

光の波動に呼吸されるまばゆい恵み

そのものであることを。

メタモルフオーゼ

しじまに耳をすます

我が身は

絶え間なく降る宇宙線の
旋律を掻き鳴らす 剥き出しの

共鳴体となる

旋律

美しい旋律とともに

緑深い湖に小波がたつ

岸辺のあちらこちらから

ボートが漕ぎだされる

ゆっくり漕ぐもの

いそいで漕ぐもの

水紋のただなかで停まるもの

元の岸に戻ろうとするもの

漂う木の葉を拾う指があり

陽の眩しさに細める目もある

誰かの塞いだ気持ちは湖面に注がれ

大勢のにぎやかな声が遠くで響きあう

狂いのない偶然と大らかな必然に用意された

ただひとつの地点でボート同士がすれ違い、離れる

あるいは 霧がかかったままで知らぬ同士

あるいは 連れ立って行く先を一にするか

すべてのボートに共通項が満ち満ちている

湖のどこかに向かい、伸びやかに開かれていること

岸に戻りかけていても

たとえ停まっているにしても

そう、耳を澄ましたならば

すべてを包み込んで

わたしたちの背中をそっと押す

朝の気配が聴こえてくる

わたしたちは日毎に生まれ変わっている

耳を澄ませば聴くことのできる

この美しい旋律は

わたしたちの朝、そのものだ

めぐみの雨

夏の夜の山頂で

満天に貼りついた星々から

惜しげなく降り注がれるのは

オノマトペ

しやらしやらしやらしやら、

きやらきやらくくくく、

ざわざわうふふふ、

くすくすくすくす

囁きは飛び跳ねるように

きらめきながら降ってくる

匂いやかな星の声がわたしの

頭から爪の先まで充滿してゆく

大気中のすべてを満たしてもなお

声は光となつてとこしえに反響するだろう

地球上のあらゆるものに共鳴して。

わたしたちの内部を明るく照らして。

実をいえば ゆたかな雨は

夏でなくとも注がれている

夜でなくとも降っている

はるか宇宙さえ遍あまねく満たしている

地表に当たって跳ね返る囁きは

何度でもわたしたちに降り注ぐため

倦むことなく空へ舞い戻る

たとえ気づかれることがなくても

わたしたちを包む雨の

なんと度量の広い温かさ！

芽ぐむまで

眼を閉じていろ

緩慢にうねり来る雑駁な土用波など

やり過ごせ

眼を閉じていろ

ものの芯をつらぬく芽を

宿らせ 漲らせるために

芽吹きするとき

おのずから開かれるために

眼は 閉じていろ

春を捧げて

あなたの

まつ毛を玩ぶとき私は

その眼が映した風をのぞきこむ

背中に指を這わせるとき私は

その脊椎の形を確かめる

頭を搔き抱くとき私は

あなたを産んだひとを嫉む

公園を散歩する小犬の赤い首輪

南の海を航行している船員たちのため息

最寄り駅へすべり込む急行電車

河原の砂利道を走る自転車の振動

都心にそそり立つ高層ビルのエレベーターの匂い

フランスの田舎町で広場を飾る白い花

あなたの窓からは

あらゆるものが天然色に息づき

見渡すことができる

いつでも私は 冷たい息を吐きながら

パノラマを食べ尽くそうとしている

若葉を食べたからといって

瑞々しい木になれるわけでもないのに

夢中で食べたからといって

あなたを胎内に宿せるわけでもないのに
食べても食べても 食べ足りないのに

何かが歯に当たった！

ほとぼしる爆発音！

目を開くと

私の質量は裏返り 宙に吸い込まれ

あなたの中に星座はすでに誕生していた

あなたは

天球を捧げてあらわれる

春の 引力

あなたがあまりにも

あなたがあまりにも

私を正確にこじ開けるので

これまでと違った開き方をしてしまいました

あなたがあまりにも

私を自由に解き放つので

まわりにめぐらせてきた囲いを見失いました

あなたがあまりにも

私を鋭く見つめるので

私も私を見つめざるを得ませんでした

そのとき気がついたので

私が泡立つ無重力の空間にひとりで浮かび

未来の軌道は書き割りできています

空気があまりにも

私を柔らかく押し包んだので

私は安堵して眠るしかなかったのです

眠りがあまりにも

美しい光を連れてくるので

私は泡立つ波とともに弾けるしかなかったのです

四月の夜

春 草花は無邪気そうに萌える

たんぽぽ すみれ チューリップ

あどけなさを装った 春の顔の上に萌える

だが 昼とは裏腹な生暖かい夜

どこかで必ず 秘めやかに事は始まっている

夜風が肌を 包むように撫でていく時

ひたひたと 滴るように春は

闇と情を交わしているのだから

路地の湿った暗がりでは

風に揺られ 囁きつづける椿たちの宴

寄り添う 離れる

もたれる くすぐる

白い花をつけた椿も 赤い花をつけた椿も

昼下がりにはおとなしく

咲き終えた花を散らしているだけだったが

人が頬を寄せあったり 睦言を交わすのと変わらない

花には花の 木には木の

艶めき 重なり合って 思いを伝える術

風がない日はどうやって伝えるだろう

星が通訳を？ それとも地下水に頼んで？

いや 椿は知っているのだ

春のかいなにただ抱かれ

身をまかせればいいことを

そして

散っていくその寸前でさえ

身を解かれる悦びのあることまで

知っているのだ

春が調えるのは

いのちの 宴

苦い実

前夜からの冷たい小雨は

朝になっても降り続いていた

傘をさした人たちが背を丸めながら

同じ方向へ歩いていく

その傘のはるか上 まったく違う方角へ

一羽の白い鳩が まっすぐ飛んでいた

その先にある目的地を目指している という飛び方で
まっすぐ飛んでいた

行き着いた先には

雨をしのぐ巣があるのか

甘い実のなる木があるのか

仲間たちが待っているのか

知りようもない答えを思い浮かべながら

不意に 胸に落ちてきた問い

目指す ということの意味とそこから生じるもの
無心に目指すこと そのものから与えられるもの

そして 目的の場所が無いのなら

目指す ということもない事実

苦い実を食^はんだように

私は鳩を見つめていた

やさしい波

やさしい波はすでに死んだ

やさしい褥しじいねは空の上

花は去っていった

陽にこうべを揺らし あめかぜに唄い

去るときを過あやまちたず決意した。

わたしはいつ去っていくのか、

どうしても決めればいいだろう

なにかから去るのか、

だれに訊けばわかるだろう

やさしい波がまた漂っている

むこうの国とこちらの国を

結びつけ、隔て、

時空にも思惑にも囚われることのない、

やさしい波だ

さあ、いつか帰ろう、むこうへ。

そして

海からわたしを眺めよう

解けないパズル

ひとの集合は

さざ波に落ちこんだ 光の輪

はなれては密着する 孤独な連帯

銀河が示す ことわり

光なのか 水なのか それとも――

問いと解が封じ込められた

流動体の謎そのものは

満ち足りた渇きの波間を漂い 群れて

語ることをしない

天使がいた夜

夜更けの眠りの奥底から シャンシャンシャン・・・と

かすかに立ち昇る 清らかなそりの鈴の音ね

兆しに目を向けると

長い髪が壁から身を乗り出していた

倦むことも諦めも忘れた茫漠の暦に

賛美歌は記されていなかったのだが。

光る面おもては黙し ただ、平安を湛える無窮のほほえみ

天使が覆いかぶさってきて わたしはびたりと塞がれた

遙か点滅する道しるべに揺らぎが滲みだし

天はにわかに膨張する

こころが無言になると 果てしない安堵が喋りはじめた

海と空と森と小鳥 あらゆるものは在るように在る

ゆったり安んじて 青青あおあおと唇にしるしを刻んでいる

覚醒せよ。わたしという存在は わたしへの賜り物である。

いのちの表層を生きるな、

星図はすでにあるのだから その身のうちに。

もがき尽くしたなら浮かびあがれ、

違たがうことなく ただひとつの海面に。

こころの中の青を育てる、

反射神経で語らず 詠いながら。

したたかで慎ましい紡ぎ唄は

星の吐息をまどつてこそ翔けてゆく

あなたは（子供だった自分）をどこへ置いてきた？

わたしは 丸呑みしていたそれを吐き出した、

もう一度 眼差しを空の高みに据えるために。

両手に握り締めた たくさんの小石など

ひとつずつ落としてゆけばいい。

けれど

本当に小石を はじめから掴んでいた？

いきものの卵のように円まじかに、

雨粒をはらって咲く花のように健やかに、

陽気な静けさを所有するとき、

わたしは美しく あなたは美しく

世界は 瑕かおひとつない光の貌かおを持つだろう

それは 決して時間軸を持つことのない

天使の 貌

抱擁

たとえ君のまなざしが

僕の頭上を越えた彼方を望んでいても

僕は捕らえられた獲物、

君のもとにいるしかない。

そこ以外 僕の居場所などあるものか、

君の手は僕の体すべてをつかんでいるのに。

そうしてときどき君は還ってくる、君の領地に。

たいした獲物はないだろ、よそには。

ひと仕事を終えた顔で君は両腕を高くかかげ、

うまそうに大きく息を吸い込むと

空を抱きしめてみせる。

つぶしてはいけない大切な大きなものが

なかに収まっているかのように、

笑顔で両腕をふわりと組み合わせる。

本当の獲物は 際きわやかに映らぬもの、

とでも言いたげに 僕に片目をつぶってみせながら。

だから僕は、君を抱こう。

さながら君が青空を抱くように、

君を 抱こう。

あそぼう

あそぼう

あそび方に思いを巡らそう、

まいにち まいあさ 目を覚ましたとき。

あそぼう

どうやって楽しもうか、

知恵をしぼってみよう

あそぶとは

こころを楽しませること

こころを喜ばせること

飽きずに自分といること

ゆだねること

ときめくこと

泣く意味を味わうこと

だれかといても

ひとりでもいい

満ちたりていられること

辟易している自分、から抜け出し

不愉快でいる自分、を脱ぎ捨て

大きなため息をついたなら 次は

あそぼう

いのち果てるまでのあいだ 根気よく

あそび続けていこう

真にあそぶ技が身についたなら
自分が一番のあそび相手だったことに気づく
広い宇宙にたったひとりしかいない仲間とは
なんと貴重なこと！

空き地の枯れ草のなか 一輪の野花在
涼風に心を寄せて揺れている。

ここにも あそぶことを怠らず生きている、
ひとつしかないのちの
ちいさな具現者がいる

いれもの

きみと僕の皮膚はなぜ

ひとつらなりではないのだろう

理性と欲望のいれものはなぜ

抱き合うのに都合のいいかたち

お互いがお互いのいれもの

むきだしの身体はそのたびに

脆く危うい火を灯す

すぐさま燃えうつりそうな、

それでいて

いまにも消えそうな炎

むきだしの心はいつでも

触れたがる

お互いの地平にうごめく、

はみ出そうとする力と

防御の姿勢をとる力とに

いれものは大切に護っている

削られ弾かれ抉られようと

瑕のつかない遥かなもの

たとえいれものが傷ついても

何ものにも侵され得ぬ宝石を

きみの肉体としてそこにあるのは
たしかにきみの身体なのに
抱きしめたときには遠くにある
僕が永遠に追いつけない、
湿原を覆しつづける身体だ

それでも僕は希^{ねが}う、
蜂蜜のようにたつぷりと
バターのように華やかに
甘やかに突き刺すように
僕がきみと混ざり合う日を

僕の大地に刻まれたすべての傷ごと
きみの太陽系が覆いつくし
僕の逆巻く水流が呻きながら
きみの海底火山に吸い込まれるとき
僕らは疾走する永久磁石

けれどもきみは云う、
糸玉がきつければ窒息してしまう
緩みを作るのが大事だと。
僕はただ、抱きしめたいだけ
混ざり合いたいだけなのに、なぜ？

きみのためらいが大きくなって
はじめて僕は気づいた、
きみを損ないかけていたことを。

心を許したとき　いれものは
中からひび割れることもあるのだと。

逃げるきみも

ためらうきみも

立ちすくむきみも

何ひとつ変わらぬきみだったのだ、いつでも。
僕らに永いときを与えるための――

きみがきみだけの、僕が僕だけの

瑕つかない遥かなものを慈しむ

きみが僕の、僕がきみの

侵しがたい宝石をうっとり眺める

それぞれのいれものを眺める

理性と欲望のいれものは

だからこそ、

ひとつらなりではなく

抱き合うのにいちばん

ふさわしいかたちをしている